

保育における歌唱教材の選択に関する一考察
—幼児が音楽の要素を感じ、歌うことを楽しむには—
幼児教育選修 島山かな

I 問題と目的

『幼稚園教育要領解説』(2008)では、領域「表現」の内容(6)「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」に、大切なこととして、「幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうこと」が示されている。幼児にとって歌う活動は楽しい遊びの一つであり、決して誰かに強制されるものであってはならない。したがって、他の遊びと同様に幼児が自ら興味を持ち、歌うことが楽しいと思えるような活動内容であるべきである。

幼児が歌う活動において感じる楽しさの中から、本研究では、メロディーやハーモニーの心地よさやリズムの軽快さなどの音楽の要素を感じ、「音楽そのもの」の美しさや面白さに気づくことによる楽しさに注目した。さまざまな楽しさの中で音楽に触れることで特に経験できる楽しさは、メロディーやハーモニー、リズムなどによるものであると考えたためである。

そして、歌唱教材が幼児の音楽的発達に即していないと、幼児たちは正しい音程やリズムをとることができない。その結果、その歌の良さを感じ、味わうことはできない。そこで、幼児が音楽を楽しむための歌唱教材として、「音楽そのもの」の美しさや面白さが感じられ、なおかつ、幼児の音楽的発達に即した歌が適しているのではないかとという仮説を立てた。

しかし、さまざまな研究で多くの子どもに歌われている歌が幼児の音楽的発達から即しておらず、幼児にとって歌いづらく、難解であるとの共通見解が挙げられている。これらの先行研究から、現在保育現場において幼児にとって難しい歌が多く歌われており、「音楽そのもの」の楽しさを味わうことが難しい現状にあるのではないかと考えられた。

そこで本研究では、立てた仮説を検証することで、幼児が歌うことを楽しむための適切な歌唱教材の選択視点を導き出すことを目的とする。

II 子どものための歌の歴史的変遷

〈唱歌〉とは、19世紀終わり、明治10年代から太平洋戦争開始時頃までに、近代日本国家による国

民義務としての初等教育の場において、音楽科の教材として作られた児童歌曲である(上、2005)。よって〈唱歌〉の原点にあるのは、教訓的な歌であり、学校を卒業してどこへいこうと「国のためにつくせ」という要求が、政府によって強く押し出されていた(山住、1994)。しかし、明治末期、教師が言文一致運動を始め、子どもになじみ深い、〈言文一致唱歌〉が作られた。政府の意図が強いなどの課題を残しながらも、次第に子どものために作られる歌として改められていった。

大正期に入ると、1918年創刊の雑誌『赤い鳥』による「童謡運動」が起こった。「童謡運動」における作詩者たちは、明治期の〈唱歌〉に対する批判的態度という点で一致していた。日本の子どもたちに風土習慣の全然違うヨーロッパの音楽をもってきたことと、子どもの生活感情について全く理解を欠いていたことがあやまりだとし、〈童謡〉は、わらべ唄という日本の子どもの生活感情を歌い込んだ歌を尊重した。また、〈童謡〉は大人の固定観念にとらわれないうで、子どもとその歌とを自由に考えようとする態度や、人間的な立場から子どもを見直していこうという姿勢を象徴するものであった。これは現代の保育における考え方にも通じる。

第二次世界大戦がきっかけで〈軍歌〉のような〈童謡〉が出てきてしまい、〈童謡〉は子どもの生活から離れてしまった。そのため、1950年代には、「子どもの歌声運動」として、長い歴史を持つ〈唱歌〉や〈童謡〉に代わり、〈子どもの歌〉として、より子どもの生活に密着し、自由な発想をもって子どものための歌を創造していこうとした(上、2005)。しかし、その頃はラジオやテレビが一気に普及したため、子どもたちにはコマーシャルソングやアニメの主題歌ばかりが歌われるようになっていった。それゆえに「子どもの歌声運動」はさしたる結果を生み出せないまま消滅した。子どものための歌がメディアに多くの影響を受けているという状況は、現代まで続いていると考えられる。

III 領域「表現」と幼児の歌唱活動について

日本における戦後からの幼児教育の歴史は、1947年、学校教育法が公布されることで始まった。そし

て、1956年に『幼稚園教育要領』が初めて刊行され、幼児教育の中で「領域」という言葉が初めて使われた。これまでの『保育要領』で示されてきた12項目を整理し、保育の内容が「健康・社会・自然・言語・絵画制作・音楽リズム」の6領域となった。

1964年に『幼稚園教育要領』は改訂されたが、1989年に改訂されるまで、この6領域はそのまま受け継がれた。しかし高度な演奏技術を育てることや、一斉に指導することに関心が寄せられており、幼児期に最も大切なことは何かを改めて検討され、1989年に『幼稚園教育要領』が改訂された。そして6領域が新しく5領域（健康・人間関係・環境・言語・表現）とされた。これまでの「絵画制作」「音楽リズム」にかわって、新しく「表現」として位置づけられた。

領域「表現」は、単に旧教育要領の「音楽リズム」と「絵画制作」が統合されたものではない。音楽と絵画、というようにはっきり区別するのではなく、幼児の中から生まれ出る表現に目を向け、感じたり、考えたりしたことの表し方が歌であったり、絵であったりするという考え方に基づいている。これは歌唱、描画などについて、あらためて幼児にとっての「表現」の意味を問い、幼児からの視点に立って考えるということである。幼児が自分なりに感じたり考えたりしたことを、保育者がしっかりと受け止め、認めていくことで、いろいろな事物に敏感に心を動かされる豊かな感性が生まれ、表現に対する心情、意欲、態度が育つことに繋がると考えられる。

また「表現」の中でも「音声」は人の感情や考え方を最も直接的に表現できる道具である。幼児が歌っている表情を見ると、実にいきいきとしていることから、幼児は「歌うこと」が楽しいから歌っていると考えられる

そして、幼児の歌の特徴は遊びを通して自然発生的に歌うことである。さらに幼児にとって、声を意識的にコントロールすることは簡単ではないが、興味・関心を持ったものに対しては、かなり積極的に表現しようとする。これらのことから、保育者は、技術的な面よりも、幼児は保育者が幼児の興味を引き出し、幼児が常に楽しんで歌っているかどうかについて留意するべきであることがわかる。

IV 幼児の歌唱に関する発達

足立(2013)は、3～5歳児の歌唱可能声域について研究を行った。そこで、幼児の歌唱可能声域に関して、足立が参考にした先行研究の調査結果に、

鈴木・藪中(2004)、柳澤(2014)、高橋(1992)の調査結果を新たに加え、再検討した。その結果から、3～5歳児の歌唱可能声域の幅は7度～8度であると言える。また、幼児の歌唱可能と考えられる最高音は2点ニであり、最低音はイであった。そして、本研究において検討した全ての先行研究で、幼児の歌唱可能声域として当てはまる音域は大体1点ニ～1点トであった。これらの2点から、本研究における幼児に適した音域を1点ハ～2点ハとした(図1)。

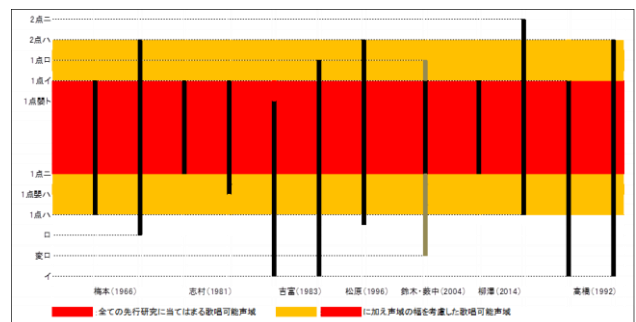


図1. 3～5歳児の歌唱可能声域についての先行研究

また5歳児を対象に、保育における歌う活動に関する実践を行うにあたって、幼児の社会性の発達などを中心に5歳児の歌唱行動との関連性について述べる。

5歳児になると、驚くほどの進歩を見せ、声の細かいコントロールができるようになる。さらに、より音楽的表現力が増し、歌詞の内容に共感した歌い方や曲想の変化に応じた歌い方もできるようになる。また、歌詞を創作して替え歌にして楽しむ姿が見られる。5歳児は、自分が歌うのをみんなに聞かせてあげようという気持ちが出てきて、ひとり、あるいは、グループで歌を発表することを楽しむようになる。同時に友だちが歌うのを、興味を持って聞くこともできるようになる。

柳澤(2014)は、声域は「個人差があり、それぞれの育つ環境や身体の発達の違いなど、一概に決めつけることはできない」と述べている。歌唱に関する発達は、その幼児を取り巻く音楽環境に大きく起因する。保育者が無理強いすることなく美しい歌声で歌い、周囲の音楽環境を整えることによって幼児の発達を自然に促すことができると考えられる。

V 幼児の声域と歌の音域に関する実践

1) 目的

幼児の音楽的発達に即していると考えられる歌とそうでない歌を幼児に提供し、それぞれを歌う幼児の様

子にどのような違いが見られるかについて調査した。それらを通して、保育における歌唱教材が幼児の音楽的発達に即していることの重要性を明らかにする。本研究では特に歌唱可能声域に着目した。

2) 方法

【実践内容】

幼児の声域に適した音域の歌と、適していない音域の歌を用いて、同一の幼児に対して歌う活動を行い、活動中や活動後の様子を記録した。

【対象】

刈谷市立O幼稚園の年長児30名（男児17名、女児13名）

高浜市立T保育園の年長児30名（男児14名、女児16名）

【実施日時】

O幼稚園：2014年10月31日、11月7日の2日間

導入 10:30～10:40

歌う活動 10:40～10:50

自主活動 10:50～11:10

T保育園：2014年11月18日、11月25日の2日間

導入 9:30～9:40

歌う活動 9:40～9:50

自主活動 9:50～10:10

※下線部の幼児の様子を考察の対象とする。

【実施場所】

同園内年長児保育室及び保育室前の廊下（テラス）

【準備物】

- ・ピアノ伴奏と保育者が歌った声が録音されたカセットテープ
- ・歌詞を書いた模造紙
- ・それぞれの物語が描かれている絵本

【使用歌】

・『桃太郎』・・・作詞：不詳、作曲：岡野貞一、1911年（尋常小学唱歌第一学年）

適ニ長調（1点ニ～2点ニ）

低ト長調（ト～1点ト）

・『浦島太郎』・・・作詞：不詳、作曲：不詳、1911年（尋常小学唱歌第二学年）

適ハ長調（1点ハ～2点ニ）

低ハ長調（ト～1点イ）

※O幼稚園で『桃太郎適』（以下、『桃適』）と『浦島太郎低』（以下、『浦低』）を、T保育園で『桃太郎低』（以下、『桃低』）と『浦島太郎適』（以下、『浦適』）を使用した。また、全4曲それぞれ2番までとした。

本研究においては音域による違いを比較するために、他の条件（歌の題材、テンポ、長さなど）ができるだけ近い2曲を選択した。また、導入や活動時間を考慮し、長すぎず、幼児にとってなじみ深いと予想される物語を題材にしている歌を選択した。

先行研究から本研究における幼児に適した音域を1点ハ～2点ハとした。それをふまえて、幼児の声域におおよそ適した音域のもの（適）と声域よりも非常に低い音域に移調したもの（低）を用意した。

【実施手順】

・歌う活動

（1）1番を保育者が幼児の前でピアノ伴奏なしで歌う。

（2）1番を保育者と幼児と一緒にピアノ伴奏なしで歌う。

（3）1番を保育者がピアノで伴奏し、幼児が歌う。

（4）2番を保育者が幼児の前でピアノ伴奏なしで歌う。

（5）2番を保育者と幼児と一緒にピアノ伴奏なしで歌う。

（6）2番を保育者がピアノで伴奏し、幼児が歌う。

（7）1番と2番を続けて保育者がピアノで伴奏し、幼児が歌う。

※それぞれの手順において、幼児が活動中にある程度歌を覚えられるまで繰り返す。

・自主活動

自主活動に関して、幼児には①準備したカセットテープ、模造紙、絵本を自由に使ってよいこと ②歌う活動以外の遊びを行ってもよいこと ③園庭などには行かず、保育室と廊下（テラス）のみで遊ぶこと ④保育者は一緒に遊ばないことを伝えた。

※保育における活動に近づくことに留意した。したがって、各園により導入や準備物に多少異なる点がある。

3) 結果と考察

各園で使用した歌とそれぞれの結果について、①楽しさ ②歌いづらさ ③歌いづらい場合の対応

の3つの視点から考察した。

①楽しさについて

楽しさについては、幼児の表情や言動などから検討する。

0 幼稚園と T 保育園の幼児の様子をそれぞれ比較した結果、筆者の予想に反して、幼児は歌の音域に関わらず『桃太郎』の方が歌っていて楽しいと感じたと考えられた。その理由として、活動時の幼児の発話や歌った回数、幼児の歌声の大きさの比較から、『桃太郎』と『浦島太郎』の認知の差が考えられる。

以上から、幼児の表情や言動の差は、『桃太郎』と『浦島太郎』の認知の差によるものと考えられ、各園において音域が適しているか否かについての相関性は見られなかった。

②歌いづらさについて

歌いづらさについては、幼児が音を「とれている」か「とれていないか」を判断の目安とする。ここで言う「とれている」とは、始めに保育者が指導し、その後全員で一緒に歌った際の音域を基準とし、その音で歌っていることを「とれている」と表現する。そして、「とれていない」個所が多くある場合を「歌いづらい」と判断した。

まず、0 幼稚園で『桃^適』を歌ったときは、ほとんどの音が正確にとれていたが、T 保育園で『浦^低』を歌ったときは、全体的にとれていない個所が目立った。また、T 保育園で『桃^低』を歌ったときは、とれていない音が多く、全体的に少し高い音域で歌っている。それに対して『浦^適』を歌ったときは、全体的にはよくとれていた。

次に、0 幼稚園で『桃^適』を歌ったときと T 保育園で『桃^低』を歌ったときを比較した。また、0 幼稚園で『浦^低』を歌ったときと T 保育園で『浦^適』を歌ったときも比較した。その結果、やはり『桃^適』や『浦^適』のときの方が、『桃^低』や『浦^低』に比べ全体的にとれている音が多かった。

さらに、自主活動における事例をもとに、詳細な分析を行った。

これらの結果から、今回の幼児の歌唱可能声域についてまとめてみると、下は1点ハ、上は1点イがとれていないことが多いため、おおよそその間が発達上出しやすい音域であるということがわかった。これは、3 歳から 5 歳児の歌唱可能声域に関する先行研究にも、ほぼ当てはまっている。

以上のことから、やはり低い音域に移調した『桃

^低』と『浦^低』は幼児の発達に即しておらず、幼児にとって歌いづらいものだったと考えられる。

③歌いづらい場合について

幼児が歌いづらい場合はどのようにして歌うのかについて、個別事例をもとに分析を行った。

すると、幼児は歌いづらい音に対して少なくとも 2 つの方法をとることがわかった。一つは歌全体を移調し、自分の声域にあった音域で歌うということである。もう一つは、歌いづらい個所だけ無理に歌い、それ以外は本来の音で歌うということである。しかし、どちらにしても伴奏をつけて一斉に歌った際には、自分と友だちやピアノの音が合わなくなる。そのため筆者が考える、「音楽そのもの」の美しさや面白さがわかりづらくなってしまいう可能性がある。よって、歌唱教材を選択する際には、やはり幼児の歌唱可能声域を把握し考慮することが大切であると言える。

また、歌唱活動中および自主活動における幼児の姿からは、5 歳児の歌唱行動の発達の特徴がいくつか見られた。このことから、保育において歌う活動をする際には、声域などの身体的発達だけでなく、歌唱行動などの精神的発達もふまえた幼児の音楽的発達についてしっかりと留意し、それぞれの年齢に即した言葉がけなどの援助や環境設定をする必要があると言う筆者の主張が裏付けられた。

参考文献

- ・文部科学省 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館、2008 年 165 頁
- ・上笙一郎編 『日本童謡事典』 東京堂、2005 年
- ・山住正己 『子どもの歌を語る—唱歌と童謡—』 岩波書店、1994 年
- ・柳澤邦子編 『領域「表現」子どもと楽しむための音楽教育へのびのびと心と身体を育む〜』 フレーベル館、2014 年
- ・足立広美 「幼児<子ども>の歌に関する一考察—幼児<子ども>の歌の音域をめぐる—」 『創価大学教育学論集』 第 64 号、99-112 頁、2013 年
- ・鈴木みゆき・藪中征代編 『保育内容「表現」乳幼児の音楽』 樹村房、2004 年
- ・高橋好子他 『音楽をたのしむ子どもたち』 文化書房博分社、1992 年